

【科目名】 ファイナンス理論	【単位数】 2 単位	【科目区分】 専門科目 展開科目
【担当者】 國方 明	【オフィス・アワー】 時間: 第 1 回授業で伝えます。 場所: 525 号室	【授業の方法】 講義
【科目の概要】 本科目では、金融にかかわる経済学のうち、証券や証券市場にかかわる部分をより深く学びます。 金融経済学 I では、ミクロ経済学の知識を使って、金融に関する最低限の理論を学びました。しかし、これらの科目は基幹科目なので、高度な知識な理論を取り上げにくいです。また、時間などの理由により、これらの科目で取り上げられない論点があります。例えば、金融経済学 I で、証券市場を取り上げました。しかし、証券市場で大きな役割を果たす証券会社については、時間の関係で省略しました。 本科目は展開科目なので、金融に対して興味・関心の強い学生に対して、金融経済学 I よりも高度な知識と理論を教えます。但し、本科目は全 15 回しか授業がないので、次の 3 種類の議論だけを取り上げます。 ① 第 1 回と第 2 回: 金融資産が取引される証券市場の議論、金融経済学 I 第 4 回の応用です。 ② 第 3 回～第 8 回: 金融資産の価格付けに関する議論、金融経済学 I 第 6 回～第 10 回の応用です。 ③ 第 9 回～第 15 回: 派生商品などの議論。 また、本科目の名前は「ファイナンス理論」なので、理論の紹介が中心になります。但し、理論を理解するために必要な範囲内で、現実の制度を紹介します。		
【「授業科目群」・他の科目との関連付け】・「なぜ、学ぶ必要があるか・学んだことが、何に結びつくか」 <他の科目との関連付け> 本科目は、金融経済学 I、ミクロ経済学、応用ミクロ経済学と統計学の知識に基づきます。まず、本科目の内容は、金融経済学 I の内容を発展させたものです。そして、金融経済学 I で、皆さんはミクロ経済学を金融に応用した理論を学びました。次に、金融では将来予測が重要になります。このため、確率・統計の知識が必要になります。 <学んだことが何に結びつくか？> 本科目では、金融経済学 I よりも高度な理論と、(最低限の)制度的な知識を教えます。この結果、現実の金融市場に対する理解が深まると期待します。		
【科目の到達目標(最終目標・中間目標)】 <最終目標> ・現実の金融市場を理解できるようになる。 <中間目標> ・金融市場にかかわる専門的知識を身につける。 ・金融市場にかかわる制度を理解する。		
【学生の「授業評価」に基づくコメント・改善・工夫】 2022 年度には、3 年生科目全体よりもまずまず高い評価をいただきました。2023 年度にも高い評価を得られるように努めます。		
【教科書】 本科目では教科書を使わず、ハンドアウト(俗にいうプリント)を用います。ハンドアウトは下記参考書に基づいて作成されています。		
【指定図書】 該当無し。		
【参考書】 参考書 1: 大村敬一、『ファイナンス論』、有斐閣、2010 年(新品を購入可能、本学図書館に所蔵済み) 参考書 2: 大村敬一・俊野雅司、『証券論』、有斐閣、2014 年(新品を購入可能、本学図書館に所蔵済み)		

<p>〔前提科目〕 ミクロ経済学、応用ミクロ経済学、統計学、金融経済学I</p> <p>私は上記科目の単位を取得していない人の履修を制限しません。但しこの人は、各科目のシラバスで指定された教科書などを自習してください。</p>	
<p>〔学修の課題、評価の方法〕(テスト、レポート等) 次の(ア)と(イ)の総合評価に基づき、履修者それぞれを評価します。 (ア) 授業内小テスト1回。択一式です。 (イ) 期末試験。択一式と記述式の併用です。</p>	
<p>〔評価の基準及びスケール〕 小テストと期末試験の総合評価に基づいて、グレードの仕切りを定めます。</p> <p>A: 80%以上 B: 70%以上、80%未満 C: 60%以上、70%未満 D: 50%以上、60%未満 F: 50%未満</p>	
<p>〔教員としてこの授業に取り組む姿勢と学生への要望〕</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 第1回の授業で、評価方法などについて補足説明を行います。できる限り出席してください。 ● 本科目は金融経済学Iで教えた内容を前提として、それに補足説明を行います。つまり、本科目自体は、金融経済学Iと比べて体系だっていません。このため、金融経済学Iを履修しなかった人や、金融経済学Iを履修してD評価またはF評価を得た人は相当苦勞するでしょう。これらに該当する人は、本科目を履修するか否かを十分に考えてください。 ● 他の学生の迷惑になる行為(例: 私語や、授業にかかわる学生同士の相談を、原則として禁じます。授業にかかわる相談も、周囲の学生にとって受講の妨げになりうることを想像してください。授業中に相談事が生じたら、國方が受け付けます。 ● 新型コロナウイルス感染拡大状況などによって、本シラバスに変更がありえます。変更が生じたら、授業内や学内掲示などで連絡します。 	
<p>〔実務経歴〕 公認会計士事務所での監査証明業務補助などの実務経験を活かし、現実の金融市場を理解できるように、金融経済学よりも高度な理論と制度的な知識を身につける授業です。</p>	
<p>授業スケジュール (新型コロナウイルス感染拡大状況や履修者の理解度などによって、スケジュールに変更がありえます。変更が生じたら、授業内で連絡します。)</p>	
第1回	<p>テーマ(何を学ぶか): 金融取引と証券会社 内 容: 金融経済学I第12回を復習して、証券会社の主要業務を学びます。 参考書1の第10章第10.1節。参考書2の第14章</p>
第2回	<p>テーマ(何を学ぶか): 株式の売買注文とその処理 内 容: 株式の売買注文の特徴を学びます。また、注文処理にかかわるルールを2つ学びます。 参考書2の第5章第3節。</p>
第3回	<p>テーマ(何を学ぶか): 株式の投資指標(単一銘柄) 内 容: 個別企業の株式のパフォーマンスを測る指標を学びます。一方、ポートフォリオのパフォーマンス指標を第7回で学びます。 参考書 該当無し。</p>
第4回	<p>テーマ(何を学ぶか): 証券の投資収益率にかかわる回帰分析 内 容: 証券の投資収益率を、データを使って分析する場合の回帰式を学びます。また、ポートフォリオのリスクをシステムティック・リスクとアンシステムティック・リスクとに分けて、それぞれの意味を理解します。 参考書 該当無し。</p>

第5回	<p>テーマ(何を学ぶか): CAPM(1)</p> <p>内容: 第5回と第6回で、第4回で紹介した回帰式の理論的基礎を学びます。この理論をCAPM (Capital Asset Pricing Model)と呼びます。CAPM は、一定の仮定を置いたうえで、証券市場が均衡する時に成り立つはずのリターンとシステムティック・リスクの関係を描きます。</p> <p>第5回では、証券市場の均衡を図示します。</p> <p>参考書1の第8章。</p>
第6回	<p>テーマ(何を学ぶか): CAPM(2)</p> <p>内容: 第5回の議論と、金融経済学Iで学んだ裁定取引の理論を併せて、リターンとシステムティック・リスクとの関係を図と数式で描きます。</p> <p>参考書1の第8章。</p>
第7回	<p>テーマ(何を学ぶか): ポートフォリオの投資指標</p> <p>内容: CAPMを応用して、ポートフォリオのパフォーマンスを測る指標を3つ学びます。</p> <p>参考書1の第9章。</p>
第8回	<p>テーマ(何を学ぶか): CAPMの現実への拡張</p> <p>内容: CAPMは精緻であるとともに実用性の高い理論です。しかし、非現実的とも考えられる仮定に基づきます。そこで、CAPMの仮定の一部を外した、より現実的な拡張モデルが開発されています。その拡張モデルを学びます。</p> <p>参考書1の第8章第5節、同第10章。</p>
第9回	<p>テーマ(何を学ぶか): 先渡取引</p> <p>内容: 金融経済学Iと本科目第8回までで、証券の売買、つまり証券と代金とを交換する取引を教えました。この種類の取引を、原資産取引といいます。本科目第9回～第13回では、原資産取引から派生する取引を教えます。派生して生み出される商品を、派生商品またはデリバティブズといいます。</p> <p>第9回では、派生商品のうち先渡取引を学びます。</p> <p>参考書1の第11章第3節。参考書2の第10章。</p>
第10回	<p>テーマ(何を学ぶか): オプション取引(1)・専門用語など</p> <p>内容: 派生商品のうちオプション取引を教えます。オプション取引は、権利の売買です。売買対象の権利は、「買う権利(コール)」と「売る権利(プット)」の2種類に分かれます。したがって、オプション取引に参加する投資家の立場は、「コールを買う」、「コールを売る」、「プットを買う」、「プットを売る」の4種類に分かれます。これら立場などを学びます。</p> <p>なお第10回の授業内で、小テストを実施する予定です。</p> <p>参考書1の第12章。参考書2の第11章。</p>
第11回	<p>テーマ(何を学ぶか): オプション取引(2)・コールの価格決定理論</p> <p>内容: 裁定取引の理論を応用して、コールを売買する際の価格の決定理論を学びます。</p> <p>参考書1の第12章。</p>
第12回	<p>テーマ(何を学ぶか): オプション取引(3)・プットの価格決定理論</p> <p>内容: 第11回の理論を、プットの価格決定に応用します。その際、プット・コール・パリティという関係を利用します。</p> <p>参考書1の第12章。</p>
第13回	<p>テーマ(何を学ぶか): 複数取引を組み合わせた取引(1)</p> <p>内容: 第14回と第15回で、原資産取引、先渡取引、オプション取引を組み合わせた取引を学びます。</p> <p>第13回で学んだプット・コール・パリティも、この取引の一種です。第14回では、プット・コール・パリティについて、図を使って理解を深めます。</p> <p>参考書2の第11章。</p>
第14回	<p>テーマ(何を学ぶか): 複数取引を組み合わせた取引(2)</p> <p>内容: プット・コール・パリティ以外の取引を学びます。</p> <p>参考書2の第11章。</p>
第15回	<p>テーマ(何を学ぶか): 派生商品の役割</p> <p>内容: 第9回と第10回で学ぶように、理論上、派生商品は社会全体の富を変えません。その一方、現実には派生商品が広く取引されています。このギャップを理解するために、派生商品の役割を学びます。</p> <p>参考書2の第11章。</p>
試験	<p>期末試験(択一式と記述式の併用)を実施します。出題範囲などについては授業内で連絡します。</p>